

第4章

ジェンダーと競争観

これまでの社会では、男の子にはたくましさや競争に打ち勝っていく力、女の子にはやさしさや協調性が期待されてきた。一方、女子の高等教育の進学率が高まり女性の職場進出が増えるにつれ、女子にも競争心が期待されるようになってきた。しかし、伝統的な男らしさ、女らしさへの期待も依然存在し、青

少年は、競争と協調（共生）、たくましさやさしさの間で、試行錯誤しながら成長している。

本章ではジェンダー（社会的性差）に注目して、高校生の競争観、共生観を考察していく。

1. 競争意識の強い男の子、弱い女の子—

図4-1は、「あなたは競争するのが好きですか」という回答を、男女別に比較したものである。

好き（「とても好き」+「やや好き」）が男子39.6%、女子19.8%と、競争が「好き」が男子は女子の2倍いる。そして、「嫌い」（「とても嫌い」+「やや嫌い」）は、女子38.2%、男子23.3%と女子に1.6倍多い。また「どちらともいえない」が男女とも4割近くいる（男子35.1%、女子40.6%）。

このように、男女とも競争に対してアンビバレントな気持ちをもっている者もかなりいるが、概して競争意識の強いのは男子、弱いのは女子である。

では、高校生はどのような点に競争心をもっているのだろうか。

「クラスの人と次の点で張り合ったり、負けたくないと思ったことがありますか」と尋ねた（表4-1）。男子は運動面と学業成績面で友だちに負けたくないと思っている。それに対して、女子は友だちと張り合ったり負けたくないと思う気持ちがすべてに弱く、「友だちへのやさしさや思いやり」だけが多くなっている（女子21.6%、男子20.0%）。

競争心に大きい性差がある項目（男子強く、女子弱い）は、順に「運動能力や記録」（差14.6%）、「数学の成績」（差12.1%）、「模擬試験の順位」（差10.7%）である。

具体的状況（テスト、異性関係）のなかで考えてみても、表4-2のように男子の方が女子より競争心をもっていることがわかる。成績をめぐるでも、異性関係でも、男子は競争的心性をもっている。ライバルは友だちである。

次に学校場面での競争をめぐるジェンダー差をみてみよう。

表4-3に示されているように、男子は

「受験競争は、他人との競争である」「学校では、競争に勝ち抜く力をきたえたい」「部活動は勝つためにやる」という競争的意見を多くもっている。女子は「受験競争は、自分との戦いである」「学校では、お互いに助け合う心を育てたい」「部活動は、楽しくやるのが大切」と、非競争的な意見や協同性を重視する意見が多くなっている。

図4-1 人と競争するのが好きか



表4-1 クラスの人に負けたくないこと（かなりそうの割合）

	（％）		
	男子	女子	差(男子-女子)
数学の成績	23.3	11.2	12.1
定期テストの順位	23.9	16.3	7.6
模擬試験の順位	25.1	14.4	10.7
運動能力、記録	27.7	13.1	14.6
異性からの人気	15.5	6.4	9.1

表 4 - 2 友だちとの競争観

		(%)	
		男 子	女 子
1. 仲のよい友人がテストの学年順位が自分よりよかった	1. よく勉強しているなど、感心する	58.2	< 68.4
	2. 自分よりいい順位なのでくやしい	39.7	> 30.0
2. 仲のよい友人の方が異性に人気がある	1. そういう友人を持って、自分もうれしい	52.4	< 69.9
	2. くやしい	42.3	> 25.9
3. 仲のよい友人と同じ人を好きになってしまった	1. 好きな人とつき合えるようにがんばる	62.5	> 48.4
	2. 友人と気まずくなるのであきらめる	33.3	< 45.9

表 4 - 3 学校場面での競争

		(%)	
		男 子	女 子
A	1. 受験競争は、他人との競争である	32.0	> 22.1
	2. 受験競争は、自分との戦いである	66.2	< 76.6
B	1. 学校では、競争に勝ち抜く力をきたえたい	25.1	> 8.9
	2. 学校では、お互いに助け合う心を育てたい	71.9	< 88.0
C	1. 部活動は、勝つために努力してこそ、充実感がある	36.4	> 25.7
	2. 部活動は、楽しくやるのが大切である	61.5	< 72.7

2. 好きなスポーツのジェンダー差

スポーツやゲームの世界は競争に満ちている。また、スポーツやゲームの世界には競争の純粋な形が残っている。高校生たちがどのようなスポーツが好きかを明らかにすることは、彼らの競争観の一端を知ることになるであろう。

表4-4は、好きなスポーツを複数選択であげてもらった結果である。

それにははっきりした男女差がある。男子の好きなスポーツ・ゲームの上位5位は「バスケット・バレーボール」(47.6%)、「野球」(44.8%)、「ゲームセンターのゲーム・テレビゲーム」(43.2%)、「サッカー」(42.5%)、「トランプ・マージャン」(41.1%)である。

一方、女子の好きなスポーツの上位5位は、「バスケット・バレーボール」(53.9%)、「テニス・バドミントン・卓球」(49.1%)、「水泳・陸上競技」(33.2%)、「野球」(24.7%)、「ゲームセンターのゲーム・テレビゲーム」(22.8%)である。

共に、上位5位に入っているのは「バスケット・バレーボール」と「野球」と「ゲームセンターのゲーム・テレビゲーム」の3つである。

男子と女子の差の大きいものは、差の大きい順に、「サッカー」(差29.5%)、「トランプ・マージャン」(差24.0%)、「ゲームセンターのゲーム・テレビゲーム」(差20.4%)、「野球」(差20.1%)、「相撲・プロレス・ボクシング」(差18.4%)、「将棋・囲碁」(差16.5%)と、いずれも男子の方が女子よりこれらのスポーツやゲームが好きな子が多い。逆に、女子の方が「好き」が多いのは「テニス・バドミントン・卓球」(差13.3%)と「水泳・陸上競技」(差12.7%)である。

男子が好むのは、賭けの要素の入ってくるゲームと集団対決の野球とサッカー、そして1対1の対決をする格闘技であり、女子の好むのは練習の成果の出る集団スポーツ、あるいは個人スポーツである。

3. 職業選択のジェンダー差

「あなたは職業を選ぶとき何を重視しますか」と聞き、1番目に重視するものの割合を表4-5に示した。

男子では「給料が高く、裕福な暮らしができる」(29.1%)が1位で、次いで「専門的知識、技術、技能が生かせる」(25.1%)となっている。

女子では男子と1位と2位が逆転する。つまり「専門的知識、技術、技能が生かせる」(35.8%)が1位で、次いで「給料が高く、裕福な暮らしができる」(24.0%)である。

また「休みが多く、余暇生活を楽しむことができる」は男子(17.0%)に多く、「社会のためになる」は女子(10.0%)に多い。

このように、給料、休暇と実利的な面を男子が重視し、専門性、社会性といった理想的な面を女子が重視している。女子が職業選択に理想的要素が強いのは、自分に合った仕事や社会的に意味のある仕事が見つからないときは無理して仕事につかなくても、家庭に入るという選択肢を考えているせいであろう。

表4-4 好きなスポーツのジェンダー差

(%)

	男子		女子
バスケット・バレーボール	47.6	<	53.9
野球	44.8	>	24.7
ゲームセンターのゲーム・テレビゲーム	43.2	>	22.8
サッカー	42.5	>	13.0
トランプ・マージャン	41.1	>	17.1
テニス・バドミントン・卓球	35.8	<	49.1
水泳・陸上競技	20.5	<	33.2
相撲・プロレス・ボクシング	22.3	>	3.9
将棋・囲碁	17.9	>	1.4

表4-5 職業選択のとき、一番重視すること

(%)

	全体		男子		女子
1. 給料が高く、裕福な暮らしができる	26.8		29.1	>	24.0
2. 休みが多く、余暇生活を楽しむことができる	13.8		17.0	>	11.0
3. 専門的知識、技術、技能が生かせる	30.4		25.1	<	35.8
4. 社会的地位が高く、尊敬される	3.0		3.2		2.7
5. 社会のためになる	8.5		6.8		10.0
6. 有名で、みんなに名が知られている	3.2		3.9		2.5
7. その他	11.9		12.4		11.6

4. 失敗や挫折への対処のジェンダー差

競争社会を維持するためには、競争をあおるだけでなく、敗れた人、挫折した人への配慮が必要である。敗れた人、挫折した人が傷つけた競争システムに不満をもったり、無気力に陥っては、社会の安定や活力は維持されない。竹内洋は、失敗への適応様式として、再加熱、冷却、縮小、代替的加熱の4つを区別している（竹内洋『選抜社会』リクルート出版、1988）。

それを参考に、大学受験や就職試験での、失敗への対処の仕方を尋ねた。

結果は、表4-6のごとくである。全体では「失敗にこりずに、再度挑戦する」という同じ目標への再加熱が54.8%と過半数を超えた。失敗しても同じ目標に再度向かうという強い意志の高校生が半数以上いるというのは

日本の青少年の健全性を示す数値であろう。次いで多いのは「別の目標を探し、それに向けて努力する」（26.0%）という代替的加熱である。「失敗したらあきらめる」（6.1%）という冷却は少ない。

この失敗への適応に関しても男女差がある。男子は「失敗にこりずに、再度挑戦する」が女子より若干多く（男子58.5%、女子51.0%）、女子は「別の目標を探し、それに向けて努力する」が男子より多い（女子32.2%、男子20.0%）。

一般に、男子は高い目標への一貫したチャレンジが男らしさとして奨励され、女子は、チャレンジ精神より、置かれた状況への適応能力が女らしさとして期待される。

高校生たちもそのような規範を内面化した結果、ジェンダー差があらわれるのであろう。

5. 共生志向、控えめが美德の女の子

前述したように、女子は競争心は強くないが、その分、協同意識や共生意識をもちあわせている。

表4-7に示されているように、女子は男子より「生きていく上で、お互いに助け合うことは大切である」「部活動は楽しくやるのが大切である」「学校では、お互いに助け合う心を育てたい」「うれしいのは、100m走でクラスのトップの記録をとることより、クラス対抗のバレーボールの試合で優勝したとき」と考える傾向が顕著である。つまり協同意識や共生観が強い。

他に女子の方が男子より多くとる行動や意識は、次のようなことである。「友人が恋のライバルのとき：身を引く」（女子45.9%>男子33.3%）、「仲のよい友人が異

性に人気があるとき：うれしい」（女子69.9%>男子52.4%）、「何でも気楽に話せる友人がいる」（女子66.1%>男子54.9%）、「クラスでリレーの選手になったとき、がんばる」（女子67.9%>男子59.2%）。

女の子は人を押しのけ前に進むよりも、一歩ゆずって控えめにするのが美德、という伝統的価値観を現代の女子高校生も内面化している。

さらに、男子より女子に多い控えめ意識には次のようなものがある。

「好きな異性に対して、自分の彼（彼女）にできなくても思い続けたい」（女子41.2%>男子24.4%）、「クラス対抗のスポーツの試合のとき、選手になれなくても応援したい」（女子46.7%>男子16.4%）、「自分の趣味で

自分より優れた人がいても、自分なりにやっていきたい」(女子68.3%>男子49.9%)、「失敗や挫折したとき、もっと自分に合ったものを探しそれに向けて努力する」(女子32.2%>男子20.0%)。

このような、女子の控えめな非競争的態度をどのように評価すべきであろうか。意見が2つに分かれるであろう。1つの意見は、このような女子の控えめな非競争的態度はこれ

までの男女の不平等社会の産物、女性自らその不平等=差別を助長しているというもの。もう1つの意見は、このような競争心を秘めつつも、一步ゆずる態度はこれからの共生社会に必要な資質であり、男性も見習うべき態度であるというものである。実際は男性の都合で女性におしつけてきた差別的なものと、人間としての普遍的美徳の両方が混在しているのである。

表4-6 失敗への対処の仕方

	(%)		
	全体	男子	女子
1. 失敗にこりずに、再度挑戦する	54.8	58.5	> 51.0
2. 高望みしたことを反省し、目標を下げて努力する	7.2	7.5	7.0
3. 別の目標を探し、それに向けて努力する	26.0	20.0	< 32.2
4. 失敗したらあきらめる	6.1	7.6	4.5
5. その他	2.8	3.3	2.4

表4-7 競争と共生

	(%)	
	男子	女子
A 生きていく上で、競争は大切である	29.0	> 11.1
生きていく上で、お互いに助け合うことは大切である	68.8	< 87.2
B 部活動は、勝つために努力してこそ、充実感がある	36.4	> 25.7
部活動は、楽しくやるのが大切である	61.5	< 72.7
C 学校では、競争に勝ち抜く力をきたえたい	25.1	> 8.9
学校では、お互いに助け合う心を育てたい	71.9	< 88.0
D うれしいのは、100m走でクラスのトップの記録を出したとき	33.9	> 22.9
うれしいのは、クラス対抗のバレーボールの試合で優勝したとき	63.8	< 75.5

6. 男の子と女の子で違う親の期待

以上みてきたような競争観、共生観のジェンダー差を生み出した要因として、周囲、とりわけ親からの期待があげられよう。親は、「意味ある他者 (significant others)」として子どもたちの価値観の形成に関与しているのである。親からの期待は、男の子に対するものと、女の子に対するものでは大きく違っている (表4-8)。

親は男の子に対して「よい成績をとり」(とても期待している：男子33.9%、女子29.2%、以下同じ)、「4年制大学に進学し」(男子75.5%、女子62.8%)、「一流大学や会社に入る」(男子20.1%、女子12.2%)ことを期待している。

一方、女の子に対しては、学歴社会、組織社会の階段を登っていくよりは、そのような男の子の伴侶となることやそのための資質を

みがくことを期待している。つまり、「友だちを大切にする」(女子38.2%>男子29.7%)、「困っている人を助ける」(女子30.3%>男子23.7%)ことを、親は女の子により多く期待している。

以上みてきたような競争と共生をめぐるジェンダー差は、生来のものというよりは、社会的に形成されてきたものである。男の子と女の子で違う親の育て方、期待、学校におけるさなざまな男女区別(差別)(カリキュラム・教科書の内容、教師の言動等：マイラ&デイビッド・サドカー、川合あさ子訳『「女の子」は学校でつくられる』時事通信社1996)メディアの影響がそれに作用している。競争と共生をめぐるジェンダー差をどう評価し、教育指導にどう生かしていくのが今後の大きな課題であろう。

表4-8 親の期待(とても期待している割合)

	(%)	
	男子	女子
1. 一流の大学や会社に入る	20.1	> 12.2
2. よい成績	33.9	> 29.2
3. 4年制大学進学	75.5	> 62.8
4. 友だちを大切に	29.7	< 38.2
5. 困っている人を助ける	23.7	< 30.3

第 5 章

学業成績と競争観

この章の目的は、「成績」に焦点をあてて今日の高校生の競争観を明らかにすることである。その際の「成績」は、調査票で「あなたの現在の成績は学年の中でどの辺ですか」と質問し、5段階（上・中の上・中・中の下・下）で回答してもらったものを使う。このうち、特に「上」と回答した者（以下「成績上位者」）と「下」と回答した者（以下「成績下位者」）に注目する。成績上位者と下位

者での「受験競争」に対する意識の違いや、彼（彼女）らにとっての「意味ある他者（significant others）の存在」のあり方に着目し、競争に対する意識の違いを探る。「意味ある他者の存在」の違いに着目するのは、学校での成績によって「意味ある他者の存在」のあり方に差が生じ、その差が競争観の違いとして現れるのではないかと考えるからである。

1. 成績上位者の競争観と「意味ある他者」

図5-1に示されているように、成績上位者は「競争をすることが好き」と答える割合が高い（成績上48.7%>同下27.1%）。さらに、「部活動は、勝つために努力してこそ、充実感がある」（図5-2）と考える割合は成績5段階中最も高く（成績上38.5%）、他人との競争の場に参加する意志を強く持っていることがわかる。また、図5-3によると、成績上位者は「高校の勉強はプラスになる」と考える割合が高い（成績上84.6%>同下71.6%）。そして、「将来、どこまでの学校に行きたいと思いますか」の質問には、「大学

以上」または「短大まで」と80%強の者が答えている（成績上83.3%>同下56.3%）。このように、他人との競争を好む成績上位者にとって「受験勉強は他人との競争」（成績上37.2%>同下28.7%）であるとの考えが強く（図5-4）、「生きていく上で競争は大切」（成績上28.2%>同下16.9%）だから（図5-5）、「学校では勝ち抜く力を育てたい」（成績上29.5%>同下14.5%）とも考えている（図5-6）。「受験競争に勝つことが成績上位者の「勉強の目的」の1つになっているのである。

図5-1 競争は好きか嫌いか

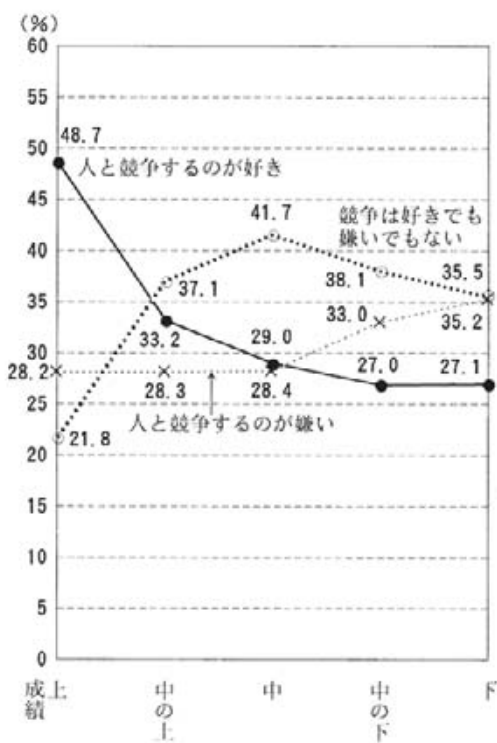


図5-2 部活動では…

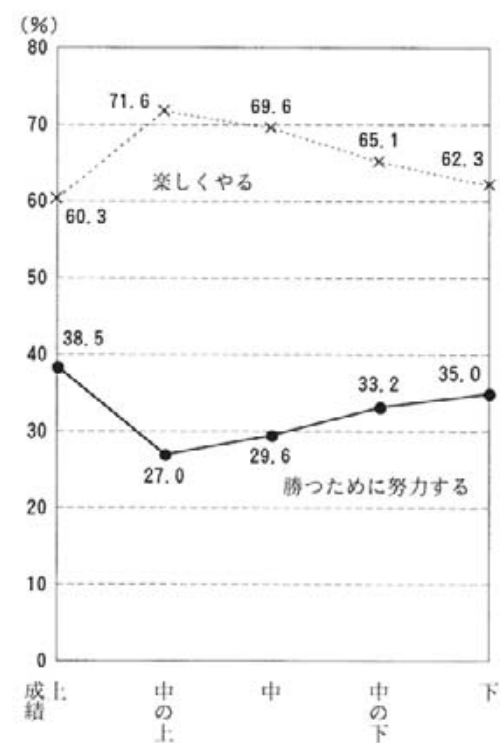


図 5 - 3 高校の勉強への考え方

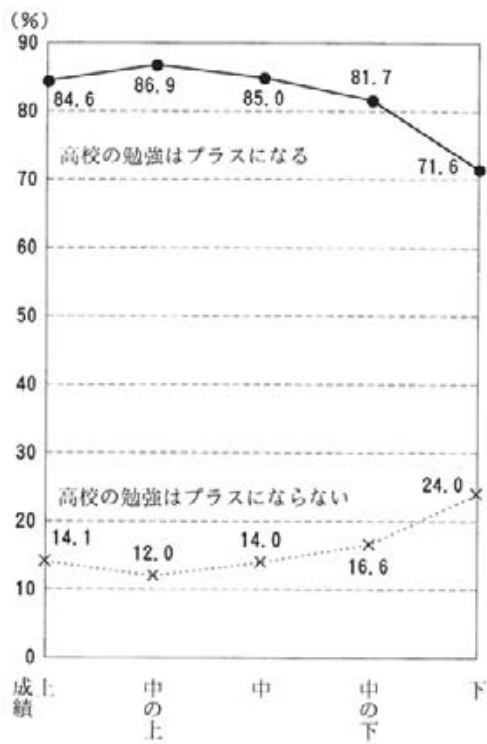


図 5 - 4 受験競争への意識

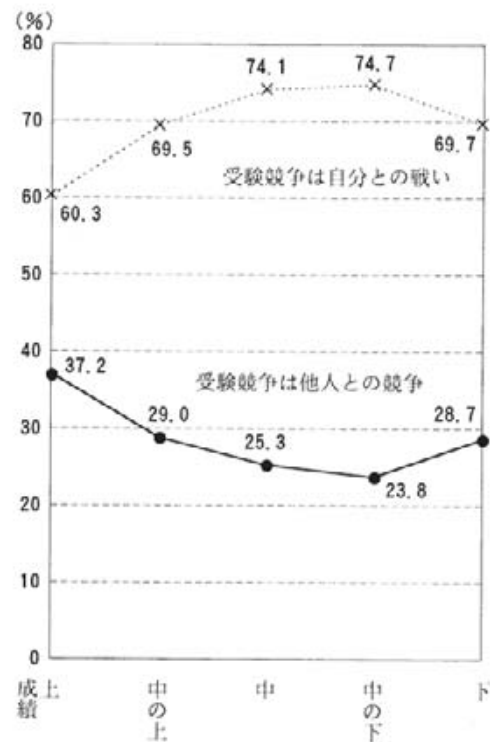


図 5 - 5 競争か協調か

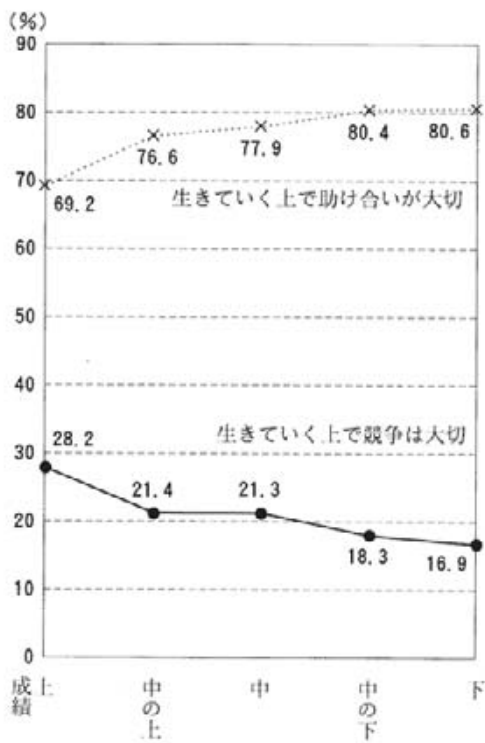
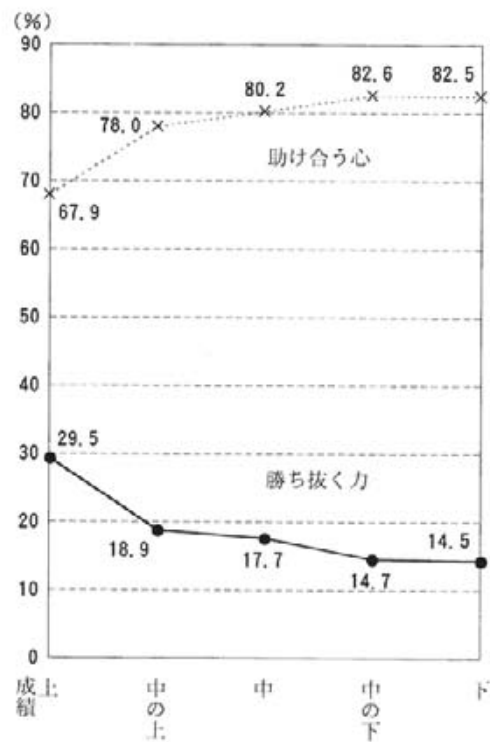


図 5 - 6 学校で育てたいのは…



では、競争を指向する成績上位者は誰をライバルと考えているのか。図5-7によれば、自分のライバルを「同世代の子」と考える割合が成績5段階中最高である。逆にライバルを「自分」と考えている割合は成績5段階中最低である。彼らは多くの「同世代の見えない相手」をライバルとして想定し、その「見えない相手」を相手に「自分なりに」努力をすることが勝敗に結びつくと考えているのではないだろうか。確かに「受験競争に勝つこと」が成績上位者の「勉強の目的」の1つであるかもしれない。しかし、たとえ競争に負けても「自分のための勉強だった」と考えることができるために、「がんばれ」と言われなくても「高校の勉強はプラスになる」と考えることができるのである。また、図5-8と図5-9からは、成績上位者は父母や友人

から「がんばれ」と言われたい傾向にある一方で、「父親」のような「成功したとき一番喜んでくれそうな人」(成績上25.6%>同下13.4%)がいることも指摘できる。自分を励ましてくれる存在が少ないにもかかわらず成績上位者が他人との競争を強く指向するのは、「父親」のような「意味ある他者」が存在するからである。つまり、成績上位者は「意味ある他者」の期待に応えたいということに競争への動機を置いていることがうかがえるのである。とは言え、「学校の先生」は「がんばれ」と一番よく励ましてくれるにもかかわらず、「喜んでくれる存在」でも「なぐさめてくれる存在」でもないという、成績上位者にとっての学校の先生は親密な関係にはないことが見て取れる。

図5-7 一番のライバル

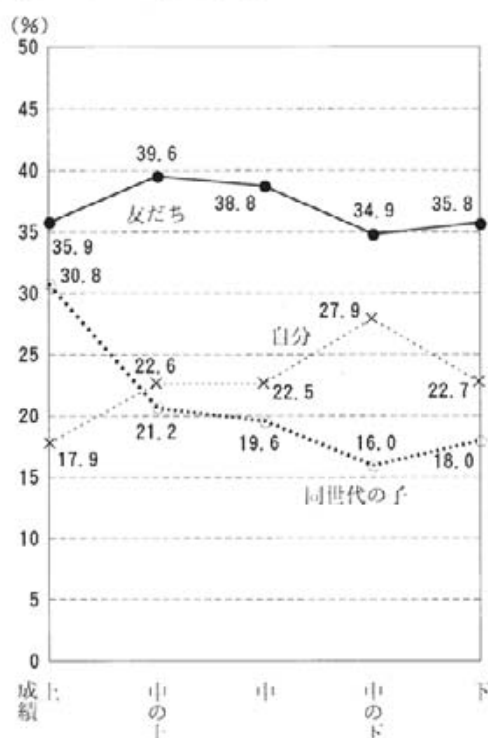
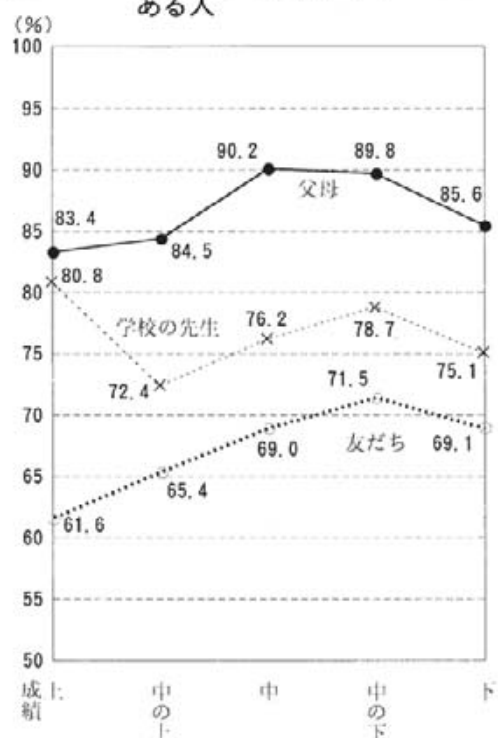


図5-8 「がんばれ」と言われることがある人



2. 成績下位者の競争観と成績の意味

一方、成績下位者が「高校の勉強はプラスにならない」(成績下24.0% > 同上14.1%)と考える割合は成績5段階中最高である(図5-3)。「失敗したらやり直しが不可能」(成績下48.1% > 同上37.2%)、「競争があると心配になる」(図5-10)、(成績下23.5% > 同上11.5%)の割合も同様に成績5段階中最高であることから、彼らは競争を嫌う傾向にあることがわかる。しかし、図5-4から

は、「受験競争は他人との競争」(成績下28.7%)と考える成績下位者が、成績上位者ほどではないが、かなり存在することがわかる。それは、成績についての競争で負けていることが、彼らに「他人との争いに負けている」事実を確認させているからではないだろうか。つまり成績下位者は成績という「尺度」に敏感であるがために、その集大成としての「学歴」に対する重要性を認めているといえる。

図5-9 成功を一番喜んでくれそうな人

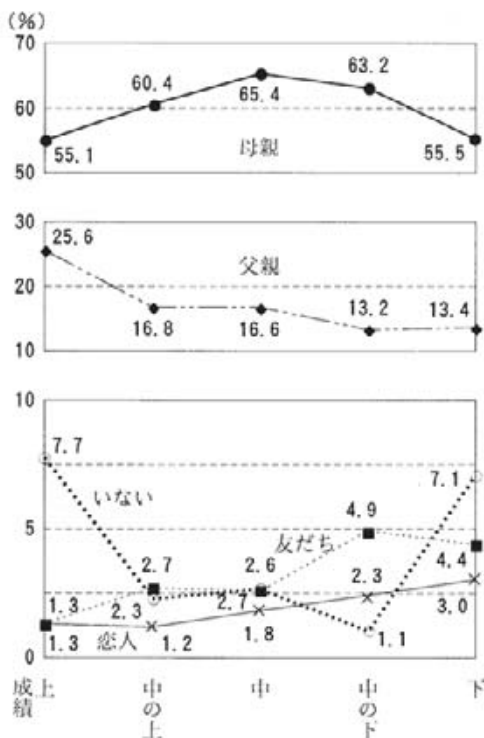
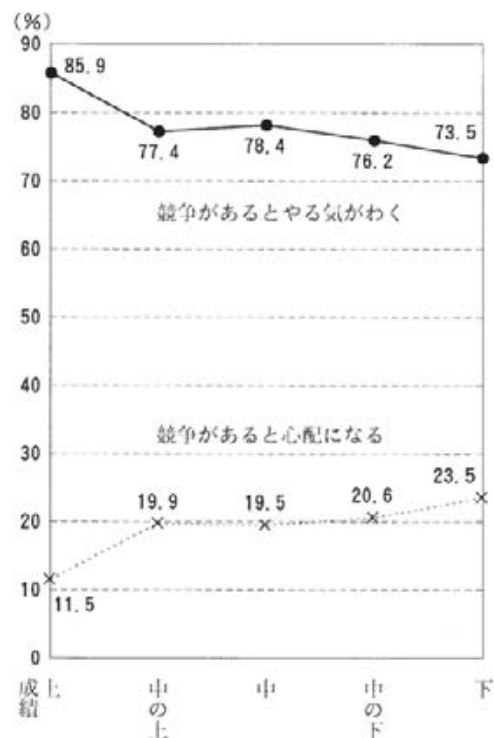


図5-10 競争に対する気持ち



事実、図5-11によると「これから学歴はますます重要になる」(成績下54.9%>同上33.3%)と考える成績下位者は成績5段階中最も多い。また職業選択の際には「高収入」を重視する傾向もみられる(成績下28.4%、上23.1%、中26.6%)。成績下位者は、自分を成績や学歴の敗者として認識してしまうのである。

では成績下位者は「他人との競争」よりも「他人との共生」を指向しているのだろうか。図5-5と図5-6からは「生きていく上で助け合うことが大切」(成績下80.6%>同上69.2%)、「学校では助け合う心を育てたい」(成績下82.5%>同上67.9%)と考えていることがわかる。また、「人に負けたくないと思ったことはありますか」の質問に対して、「そのように思ったことはない」(成績下6.6

%>同上1.3%)と答えた者は成績5段階中最も多く、他者との共生を意識している傾向が読み取れる。一方では確かに、図5-9と図5-12を見ると、「成功したときに喜んでくれる人」も「失敗をなぐさめてくれる人」も「いない」とする人は成績5段階中多い方であることがわかる。また、図5-8からは成績下位者が「がんばれ」と言われない傾向にあることもわかる。しかし、「成功したときに喜んでくれる人」や「失敗をなぐさめてくれる人」として、恋人や特に友人をあげる割合は成績上位者よりも多い。つまり、成績下位者は父母の期待や心配をそれほど感じてはいないが、恋人や友人の存在感は大きいものであると言える。成績下位者の共生意識は、恋人や友人といった「意味ある他者」の存在によって育てられているのである。

図5-11 学歴の重要性

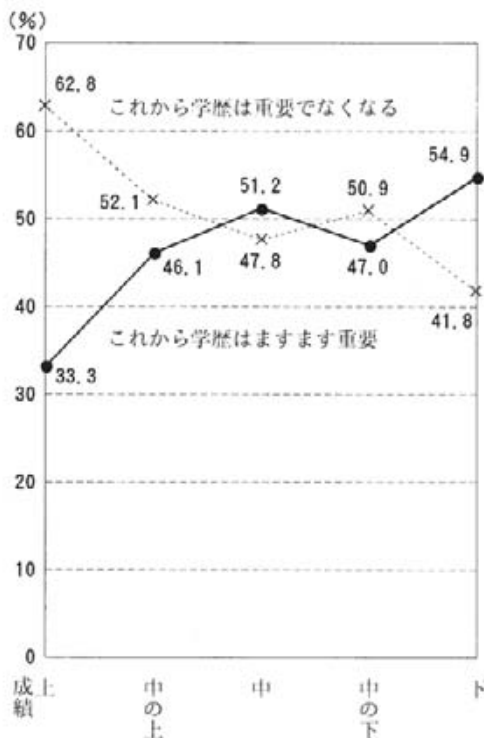
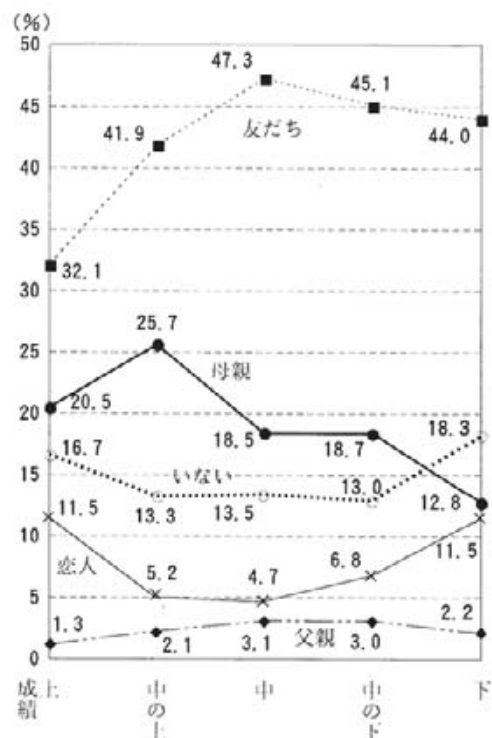


図5-12 失敗をなぐさめてくれそうな人



3. 成績中位者の競争観と共生観

ここで、成績中位者についても簡潔に触れておこう。どの図を見ても、成績中位者に関しては、おおむね成績上位者と下位者の中間の割合を示していることがわかる。特に図5-1によれば、成績中位者は「競争は好きでも嫌いでもない」とする割合が最も高い（成績中41.7%、同上21.8%、同下35.5%）。また、成績上位者と下位者の「中間的存在」という傾向は「共生」についても同じであることが図5-5と図5-6からわかる。つまり、成績中位者は「競争」と「共生」の両方への指向性を「ほどほど」に持っているのである。

では、成績中位者にとっての「意味ある他者」は誰なのか。図5-8によれば、成績中

位者に「がんばれ」とたきつける役割を最も果たしているのは「父母」（成績中90.2%、同上83.4%、同下85.6%）である。そして図5-9からは「成功を一番喜んでくれそうな人」として「母親」を、また図5-12からは「失敗をなぐさめてくれそうな人」として「友だち」をあげる割合が成績5段階中最高であることがわかる。図5-7からは「一番のライバル」として「友だち」をあげる割合が高いこともわかる。つまり、成績中位者には人一倍強い競争意識はないが、「母親」や「友だち」などの存在があるために「ほどほど」の競争意識があると言えるのである。

4. 競争へ動機づける「火種」

本章のまとめとして、まず本人の動機づけにかかわる「意味ある他者の存在」について、もう一度見ておこう。ここで改めて注目したいのは、図5-9の「成功したときに一番喜んでくれそうな人」である。図5-8によると、成績の上下を問わず「がんばれ」とたきつける役割を最も果たしているのは「父母」である。だが、上位者は「父親」、中位者は「母親」、下位者は「友だち」という差異があることがわかる。つまり、成績が下位の者には「家庭外の」友人や恋人に対人関係の中心があるといえ、中・上位者はその逆であると言える。ただし「恋人」は調査対象者の全員にいないので比較対象にしづらいが、上位者を「なぐさめてくれる存在」として無視できない割合を示している（図5-12）。その分だけ成績上位者には強く動機づけをする存在が多いと考えることもでき、そ

の意味では成績上位者には家庭内外に「強く動機づけをする人」がいると言えるだろう。同じ視点で中・下位者をみるなら、中位者には「弱く動機づけをする人」が家庭内外にいる。下位者には、家庭内には動機づけをする人はいないが、家庭外には「弱く動機づけをする人」がいると言えるだろう（表5-1）。

表5-1 動機づけの「火種」の強弱

	家庭内	家庭外
成績上位者	強い	強い
中位者	弱い	弱い
下位者	ない	弱い

では、成績を通して見た「意味ある他者の存在」は高校生の競争意識に影響を及ぼしているのだろうか。成績上位者には強く動機づけをする存在が身近にいて、しかも不特定多数の「同世代の子」をライバル視することと相まって、競争意識が高められているとみられる。そして勝敗の基準は常に自分中心に設定されていると言えるだろう。一方、成績下位者は競争よりも共生を重視することに加えて、競争をたきつける強い存在を持たないことから、競争に対する指向性が弱いと考えら

れる。しかも自分の望まないところで競争にさらされているために、競争の勝敗の基準は自分の中には存在していない。

調査対象者を中心に「意味ある他者」の言動を見ることで、他者の言動の中に競争への動機づけをする「火種」の存在が指摘できるならば、他者の存在が競争意識に影響を及ぼす可能性も指摘できる。「火種」によって点火された競争意識を最も具体的に表現した結果の1つが成績であると言えはしないだろうか。

第 6 章

親からの期待と競争観

1. 親たちの期待すること

これまでみてきたように、過半数の親は子どもに「がんばれ」と励ましている。励ます内容は多岐にわたるだろうが、本章ではそれを「子どもからみた親の期待」を軸に検討してみたい。親の期待は子どもの競争観とどのようなかかわりがあるのだろうか。

表6-1でもわかるように、やはり親（または保護者＝以降も同じ）の過半数は子どもへの期待を口に出して伝えている。多少、男子に対する割合が高いが、全体では「よく言う」「ときどき言う」を合わせると51.4%になる。

表6-1 親は期待を口に出すか × 性

	(%)		
	全 体	男 子	女 子
よく言う	14.4	14.4	14.3
ときどき言う	37.0	38.8	35.5
あまり言わない	32.5	31.1	33.8
ぜんぜん言わない	13.3	12.9	13.9

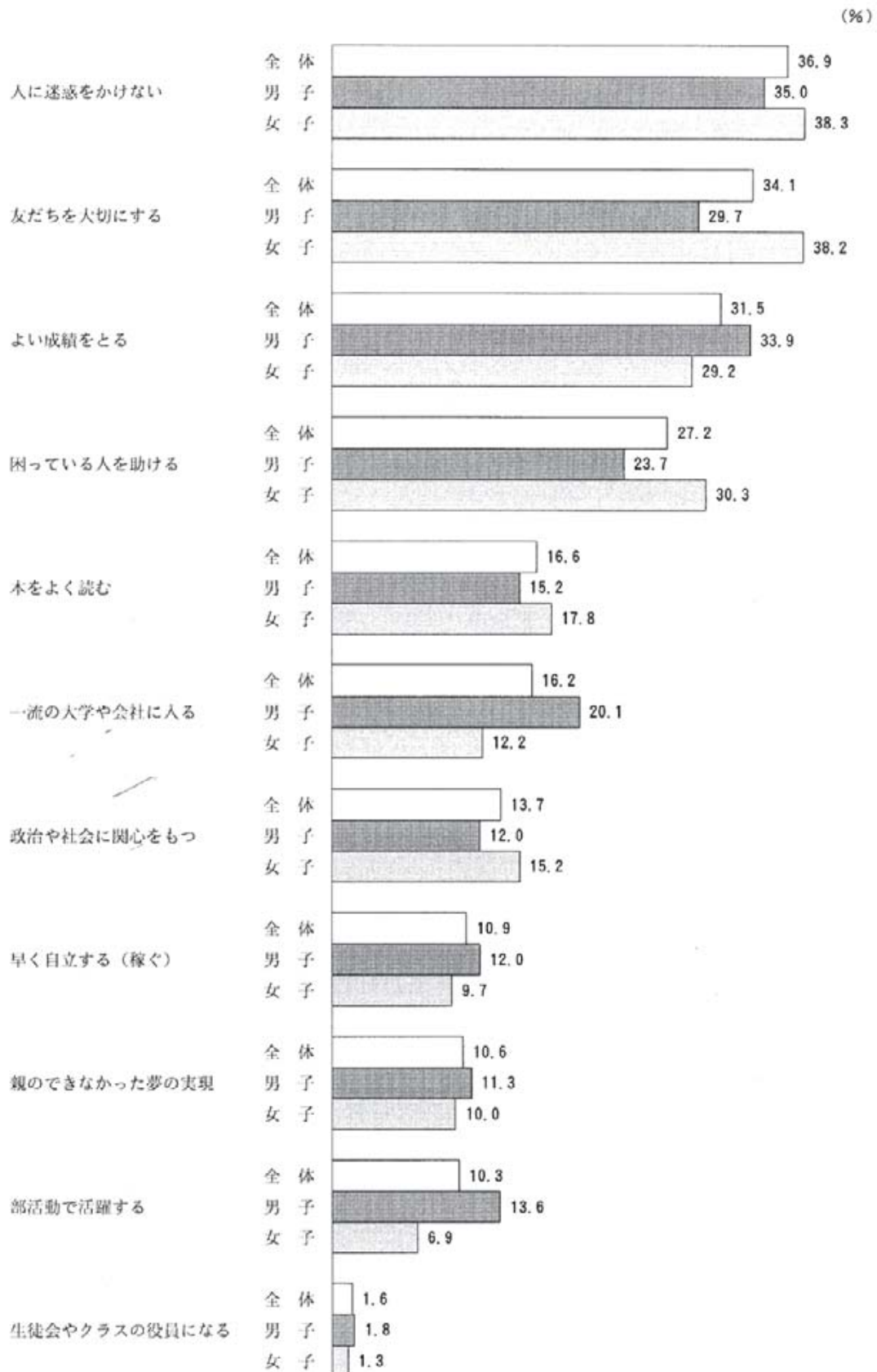
こうした期待の内容を期待の高さと合わせてみたのが、図6-1である。ここでは、親からの期待について11の項目をたて、「とても期待している」「やや期待している」「あまり期待していない」「ぜんぜん期待していない」「わからない」の程度で、生徒たちからみたときの親の期待の強さを聞いている。図ではこのうち、「とても期待している」とした割合が全体で高かったものから順に並べているが、「人に迷惑をかけない」36.9%、「友だちを大切にする」34.1%、「困っている人を助ける」27.2%というように、上位には生きていく上でのスタンスとして他者との「共生」や「配慮」を期待する項目があがってくる。これに「よい成績をとる」31.5%を合わせた4項目が、他を大きく引き離している。

これに対して、生徒会やクラスの役員などを積極的にこなすことへの期待は特に低く、

図中にはないが「やや期待している」を合わせても9.9%にとどまる。その一方、「本をよく読む」「政治や社会に関心をもつ」といった知識教養や社会的関心への期待、また「一流の大学や会社に入る」「部活動で活躍する」といった世俗的、競争的な期待を強く求める親は、全体で10~15%ほどである。

男女別にみると、すでに4章でもみたことであるが、親からの期待には子どもの性差による違いがある。このうち女子との比較で男子に多いのは、「よい成績をとる」33.9%：29.2%、「一流の大学や会社に入る」20.1%：12.2%、「部活動で活躍する」13.6%：6.9%。逆に女子に多いものは、「友だちを大切にする」38.2%：29.7%、「困っている人を助ける」30.3%：23.7%で、さらに「本をよく読む」「政治や社会に関心をもつ」といった項目にもその傾向がみられる。

図6-1 親からの期待（とても期待している）



これらの分け方からすると、男子には「世俗的、競争的な期待」が高く、女子には他者との「共生」や「配慮」、また「知識教養や社会的関心への期待」の高さをみることができ。これに関連して図6-2をみると、近年女子の高等教育への進学率が上昇したとはいえ、親の期待ではそれを男子に望む割合が高い。以上からすると、親からの期待は全体としては「共生」的なものが高いが、「共生」的なものの中には伝統的な性差に基づく期待が微妙に同居しているように思われる（この点に関しては、今回のサンプルの地域

的な特性から、一般化して考えるには一定の留保が必要だと思われることも付記しておきたい）。

さて、図6-1で「親からの期待」について尋ねた11項目の回答について因子分析を試みた。因子分析は、質問への回答パターンをもとに項目間を結ぶ特定の類型（因子）があるのかをさぐるもので、必ずしも先の回答で高い支持を得ていたものがそこに含まれるわけではない。表6-2がその結果である。表中に下線を引いた数値は、因子を特徴づける要素として採用したものである。

図6-2 親の進学期待



これらをもとに2つの因子を導き出した。このうち第1因子は「友だちを大切にする」「困っている人を助ける」「人に迷惑をかける」という項目で特徴づけられている。相手に対するやさしさや配慮といった他者に対する「共感的・共生的態度」を重視する期待として、「思いやる期待」と名づけた。

これに対して、第2因子は「一流の大学や会社に入る」「よい成績をとる」「親のできなかった夢の実現」といった項目で特徴づけられている。自分自身の課題達成に力点が置かれるとともに、それが常に現状よりも「上を

めざす態度」を重視する期待として、「上をめざす期待」と命名した。

因子は、回答の傾向を説明する力の強いものから、それぞれ第1、第2の順に並べられているが、これまでの章でみてきた「共生」と「競争」という2通りのタイプが、親からの期待の中にもみることができるようと思われる。以下では、こうした期待の内容にもう少し踏み込んで検討することにしたい。

表6-2 子どもへの期待のタイプ

	「思いやる期待」 (第1因子)	「上をめざす期待」 (第2因子)
友だちを大切にする	<u>.85742</u>	.05143
困っている人を助ける	<u>.76893</u>	-.00821
人に迷惑をかける	<u>.56191</u>	.07075
部活動で活躍する	.23406	.04429
政治や社会に関心をもつ	.22892	.15521
本をよく読む	.15961	.14589
早く自立する(稼ぐ)	.07600	.16670
よい成績をとる	.06578	<u>.59684</u>
親のできなかった夢の実現	.03502	<u>.41228</u>
生徒会やクラスの役員になる	.00331	.17691
一流の大学や会社に入る	-.00593	<u>.89978</u>

— は因子を特徴づける要素として採用したもの

2. 親の期待と学年差・成績差

(1) 親の期待と学年差

こうした親からの期待は、子どもたちの学年によって異なるものなのだろうか。一般的に考えれば、受験が意識されるにしたがって成績などに関する期待が上級生で高まることは予測される。

この点をみたのが表6-3である。これからもわかるように、3年生では「よい成績をとる」ことへの期待が他の期待を押さえて33.6%と1位を占めている。また、2年生ではこれが2位であるものの、3学年の中では成績に対する期待が34.5%と一番高くなっている。これに対して1年生では「成績」は28.1%で、期待の上位にはあるものの上から4番目の期待であった。やはり、上級生では成績に関する期待が強く向けられているようである。

また全体的にみると、1年生は親からの強い期待を多様な側面でもとらえていることがわかる。このうち、「人に迷惑をかけない」「友だちを大切にする」「困っている人を助ける」といった「共生的」な期待については、1年生が他の学年に比べて高い期待を受けているとしている。その中でも、特に相手に積極的・具体的な働きかけを期待した「困っている人を助ける」についてみると、1年生は31.3%、2年生が24.7%、3年生22.6%である。こうした期待が1年生では特に強く求められる一方で、2、3年生では、相手に対する具体的な行為をとまなうそれは、上にみた「共生的」な期待の中では割合を減らしている。この傾向は「友だちを大切にする」とい

う項目にもみられるが、これからすると、親からの期待は周囲には配慮を求めるものの、自分の子ども中心の期待へと軸足を移していることがうかがわれる。

また、「部活動で活躍する」「本をよく読む」「政治や社会に関心をもつ」といった項目でも、他の学年に比べて1年生での期待が高く、特に3年生との間ではその差が目立ってくる（「本をよく読む」1年19.8%：3年10.0%）。こうしてみると、親の期待は各学年で親からの期待が異なり、特に上級生ほど成績に対する期待の割合が増すだけでなく、親からの期待の幅が狭まっていることがわかる。

前節では親からの期待に2つのタイプがみられることを指摘したが、「思いやる期待」としての「共生的」期待は、すでにみたように上級生ほどその割合が低くなっている。では、もう1つの「上をめざす期待」が高くなっているかということ必ずしもそうではない。このタイプを構成する項目でみると、たしかに「よい成績をとる」ことの期待は上級生ほど高まっているが、「一流の大学や会社に入る」「親のできなかった夢の実現」では、横ばいかやや減少である（「一流の大学や会社に入る」1年15.6%：2年16.7%：3年16.4%）。その点からすると「上をめざす期待」は学年を通じて比較的一定の期待でもあるといえるだろう。その中で「よい成績をとる」ことは、「上をめざす期待」のタイプにとどまらない幅広い親たちの期待であることがうかがわれる。

表 6 - 3 親からの期待（とても期待している）× 学年

(%)

	全 体	1 年	2 年	3 年
人に迷惑をかけない	36.9	<u>38.6</u>	<u>37.4</u>	<u>32.1</u>
友だちを大切にす	34.1	<u>37.9</u>	<u>32.4</u>	<u>28.7</u>
よい成績をとる	31.5	28.1	<u>34.5</u>	<u>33.6</u>
困っている人を助ける	27.2	<u>31.3</u>	24.7	22.6
本をよく読む	16.6	19.8	16.1	10.0
一流の大学や会社に入る	16.2	15.6	16.7	16.4
政治や社会に関心をもつ	13.7	14.7	13.3	11.8
早く自立する（稼ぐ）	10.9	10.1	12.3	10.3
親のできなかった夢の実現	10.6	11.9	10.2	8.7
部活動で活躍する	10.3	14.3	7.6	6.7
生徒会やクラスの役員になる	1.6	2.4	0.8	1.0

— はそれぞれの上位3位

(2) 親の期待と成績差

こうした親からの期待を、表6-4では生徒の成績との関連でとらえてみた。成績についての分類は、生徒自身の自己評価に基づくものである。それぞれの割合は、上3.8%、中の上23.4%、中30.2%、中の下22.8%、下17.8%であった。

表中に下線をつけた親からの期待が強く出ている上位3位に入った項目でみると、「人に迷惑をかけない」「友だちを大切に」「よい成績をとる」が成績の上位、中位では共通の項目で、自分の成績を「下」としたもののなかのみ「よい成績をとる」の代わりに、「困っている人を助ける」が入ってくる。ただし、上位、中位のものでも3位までの順位や割合にはそれぞれの特徴がみられる。

このうち生徒たちの中に限られた層ではあるが、自分の成績を「上」としたものでは、親から「よい成績をとる」ことへの強い期待を感じているものが50.0%と群を抜き1位を占めている。また、「本をよく読む」「政治や社会に関心をもつ」といった幅広い教養や関心や、「一流の大学や会社に入る」「親のできなかった夢の実現」といった現実的で実利的

な期待を感じているとするものが他の生徒と比べて多い。これからすると、期待のタイプのうち「上をめざす期待」は、どちらかといえば成績の上位者が強く受け取っていると考えるだろう。

これに対して、成績が下位になるほど「よい成績をとる」ことについて、親からの強い期待を受け取るものの割合が少なくなっている（中の上34.6%：中31.7%：中の下29.4%：下25.1%）。

一方、上で少し触れた自分の成績を「下」としたものでみると、彼らが最も強く期待されていると感じているのが「人に迷惑をかけない」ことである（42.6%）。その他、他の生徒との比較で目立つのは「部活動で活躍すること」や、「早く自立する（稼ぐ）」ことへの期待である（「部活動で活躍する」上7.7%：中の上9.1%：中7.9%：中の下12.6%：下14.2%）。

このように、全般的にみれば、親からは成績を問わず他者への配慮を求める「思いやる期待」が高いものの、同時に生徒の成績の上位者と下位者の間では期待されるフィールドに違いのあることがうかがわれた。

表6-4 親からの期待（とても期待している）× 成績

(%)

	上	中の上	中	中の下	下
人に迷惑をかけない	35.9	34.4	33.7	38.5	42.6
友だちを大切にする	30.8	35.3	34.6	32.3	34.2
よい成績をとる	50.0	34.6	31.7	29.4	25.1
困っている人を助ける	26.9	27.0	25.9	27.4	28.9
本をよく読む	23.1	15.4	18.7	15.5	13.1
一流の大学や会社に入る	24.4	18.0	15.1	14.3	16.1
政治や社会に関心をもつ	17.9	13.5	15.6	11.9	11.7
早く自立する（稼ぐ）	10.3	10.8	8.9	11.1	14.2
親のできなかった夢の実現	19.2	10.8	11.1	8.3	10.4
部活動で活躍する	7.7	9.1	7.9	12.6	14.2
生徒会やクラスの役員になる	3.8	1.2	1.6	1.3	1.6

——はそれぞれの上位3位

3. 親の期待と家庭環境

(1) 親の期待と家庭環境

以上のように、子どもの性差、学年、成績ごとに親からの期待には独自の特徴があることをみてきたが、ここでは次にそれぞれの家庭の条件（家庭環境）によって親からの期待が異なるものなのかをとらえておきたい。

特に、近年「ハビタス」ということばで語られるように、子どもたちが生まれ育った環境で身につけたことが、その後の学校生活での見えない障壁となり、子どもたちの行動や意識を規定しているとも言われる。こうした家庭の文化的基盤（文化資本）を背景とした「育ち」、つまり「ハビタス」が、子どもたちに向けられる親たちの期待に関連しているのだろうか。

そこで、ここでは「家にある本の量」を家庭の文化的背景の指標とし、親からの期待との関連をみることにした（表6-5）。これを指標としたのは、すでにいくつかの調査研究で同様に用いられてきたことに加え、今回得られたデータとしても各家庭での本の量が適度に分散し、比較検討が可能だと思われるからである。ちなみに全体の割合でみると、60冊未満35.1%、100冊くらい23.6%、200冊くらい13.8%、300冊くらい10.4%、400冊以上13.6%である。

これで見ると、比較的差のある期待は「本をよく読む」「政治や社会に関心をもつ」といった教養や社会的関心に関する項目で、300冊くらいから400冊以上の「本の量」が多い家庭でみられる（「本をよく読む」60冊未満13.9%：100冊くらい14.4%：200冊くらい18.7%：300冊くらい22.0%：400冊以上24.4%）。やはり、家庭での「本の量」が「文化的背景」として親の期待に反映しているのだろうか。またこの傾向は、多少ばらつきはあ

るものの、「人に迷惑をかけない」「困っている人を助ける」という「共生的な期待」に関する項目でもみられる。

これに対して、「友だちを大切にする」「よい成績をとる」という項目では、「本の量」にあまり関連はみられなかった（「友だちを大切にする」60冊未満36.8%：100冊くらい30.5%：200冊くらい37.3%：300冊くらい35.5%：400冊以上35.8%）。

その中で、「本の量」が400冊以上の家庭では、こうした項目を除くと、全般的に親から強い期待を受けていると感じている子どもの占める割合が多くなっている。特に、「一流の大学や会社に入る」などの「上をめざす期待」についても、400冊以上の家庭では強い期待がかけられている（「一流の大学や会社に入る」60冊未満16.2%：100冊くらい17.5%：200冊くらい16.2%：300冊くらい13.1%：400冊以上20.1%）。

こうした「本の量」の違いは、子どもへの行動にも現れるものなのだろうか。表6-6では、それを「親が期待を口に出すか」ということとの関連で、特に60冊未満と400冊以上の家庭の間でみることにした。

これによると、多少であるが期待をよく口にするのは「本の量」が400冊以上の家庭に多くみられる（60冊未満14.7%：400冊以上18.6%）。一方、口に出さない家庭は、60冊未満13.9%、400冊以上17.6%というように、これもまた400冊以上の家庭に多くみられる。この点からすると、400冊以上の家庭は子どもへの期待の表し方が比較的是っきりしているようである。

このように、「ハビタス」という点から見ると、親からの期待の内容と行動には、その家庭の文化的環境がある程度関連していることがうかがわれる。ここでは、それを「本の

量」を中心にみたが、特に400冊以上の蔵書がある家庭で特徴がみられた。ただし「ハビタス」、つまり「育ち」の文化的背景が子どもや親の意識や行動を一律に規定していると

考えるのも危険である。同じ文化的背景を負いながら、それぞれ独自の期待や行動があることも留意しておきたい。

表6-5 親からの期待（とても期待している）× 家にある本の量

	(%)				
	60冊未満	100冊くらい	200冊くらい	300冊くらい	400冊以上
人に迷惑をかけない	38.4	34.6	35.6	39.3	43.4
友だちを大切にする	36.8	30.5	37.3	35.5	35.8
よい成績をとる	33.5	31.1	31.0	31.8	33.7
困っている人を助ける	27.0	24.5	27.5	32.7	32.6
本をよく読む	13.9	14.4	18.7	22.0	24.4
一流の大学や会社に入る	16.2	17.5	16.2	13.1	20.1
政治や社会に関心をもつ	11.9	12.3	13.7	15.4	21.5
早く自立する（稼ぐ）	11.6	9.5	10.6	7.5	17.2
親のできなかった夢の実現	10.9	11.1	8.8	7.9	14.7
部活動で活躍する	12.7	7.6	9.5	12.1	10.0
生徒会やクラスの役員になる	1.8	1.9	0.0	2.3	1.4

表6-6 親は期待を口に出すか × 家にある本の量

	(%)	
	60冊未満	400冊以上
よく言う	14.7	18.6
ときどき言う	37.8	33.7
あまり言わない	33.5	29.7
ぜんぜん言わない	13.9	17.6

(2) 親からの期待と親の生活の満足度

次に、親からの期待を親の生活の満足度と関連してみることにしたい。生活への満足度が子どもへの期待に反映するものなのだろうか。

まず、子どもたちに自分の親の生活に対する満足度を聞いてみた。父親（またはそれに代わる人）では、とても満足14.6%、やや満足34.4%、どちらともいえない31.4%、やや不満10.3%、とても不満3.0%であった。また母親（またはそれに代わる人）では、とても満足12.1%、やや満足31.6%、どちらともいえない32.7%、やや不満14.9%、とても不満4.4%で、母親の方が父親よりも多少現在の生活に対する不満の割合が高かった。

このうち、父親、母親それぞれで「とても満足」と「やや満足」、また「やや不満」と「とても不満」を合わせたものと親からの期待の関連をみたのが表6-7である。

表中に下線をつけた上位3位までの項目で見ると、生活の満足度の低い親では「よい成績をとる」ことへの期待が高く、父親、母親ともに第1位を占めている（父親37.6%：母親36.8%）。また、「一流の大学や会社に入ること」「親のできなかつた夢の実現」「早く自立する（稼ぐ）」といった項目でも、生活の満足度の低い親の方に高い期待のあることが

わかる。

これに対して、生活の満足度の高い親でも「よい成績をとる」ことへの期待が低いわけではないが、それ以外の「人に迷惑をかけない」や「友だちを大切に使う」といった項目に対して高い期待を寄せていることがわかる（「人に迷惑をかけない」父親41.8%：母親42.4%）。学校生活についてもみても、「部活動で活躍する」ことへの期待が高いのは、生活への満足度の高い親たちである。

また、表中にはないが、現在の生活に「とても満足」とした親は、これらの期待がさらに高い（「人に迷惑をかけない」父親49.2%：母親50.6%）。合わせて、彼らは「本をよく読む」ことや「政治や社会に関心をもつ」といった幅広い期待を、子どもたちに対して寄せている。

このように、親たちの生活に対する満足度は、子どもたちに対する期待に反映していることがうかがわれる。先にみた親からの期待の2つのタイプに合わせていうと、満足度の低い場合には「上をめざす期待」が、満足度が高い場合は「思いやる期待」が強くみられると言えるだろう。またすでにみたように、「成績」に対する期待は今日の親たちが子どもたちに求める共通の期待でもあるようである。

表6-7 親からの期待（とても期待している）× 親の生活の満足度

(%)

	とても+やや満足		とても+やや不満	
	父親	母親	父親	母親
人に迷惑をかけない	41.8	42.4	36.5	35.3
友だちを大切にす	40.1	41.7	36.9	31.2
よい成績をとる	33.0	31.9	37.6	36.8
困っている人を助ける	32.6	33.0	29.2	25.4
本をよく読む	19.0	18.4	17.5	16.4
一流の大学や会社に入る	15.9	14.3	21.5	23.9
政治や社会に関心をもつ	15.6	15.9	16.4	16.1
早く自立する（稼ぐ）	11.1	10.2	15.3	18.9
親のできなかった夢の実現	11.7	9.7	16.1	16.9
部活動で活躍する	13.8	13.8	6.6	7.3
生徒会やクラスの役員になる	1.9	2.1	2.6	1.3

はそれぞれの上位3位

4. 親の期待と競争意識

以上のように、子どもに向けられる親からの期待には、子どもたちの学年や成績といった属性や特徴によって、その内容が異なるだけでなく、家庭の文化的背景や親たちの生活によってもそれが異なることがわかった。そこで最後に、こうした親たちの期待が子どもたち自身の競争意識（競争観）とどのように結びつくのかについて、みておくことにしたい。

表6-8は、これまでみてきた「親から期待される項目」を「あなたは人と競争するのが好きですか」という質問の結果との関連でみたものである。ただし、これまでと違うのは、親からの期待について「とても期待している」という強い期待だけでなく、「ぜんぜん期待していない」「わからない」という回答についても比較している点である。

まず、親たちから強い期待を感じている場合についてみると、競争に対する意識にやや多様性がある。大きく分けると「競争を肯定するもの」と、「競争を肯定、否定、どちらともいえないと3分するもの」との2つに分けてみることができる。このうち「生徒会やクラスの役員になる」は、実数が極端に低いので除いて考えると、前者は「部活動で活躍すること」や「一流の大学や会社に入る」ことなどを親が強く期待している場合に、生徒たちの間に肯定的な競争観をみることができる（「部活動で活躍する」で「競争がとても+やや好き」47.8%）。

これに対して「人に迷惑をかけない」「友だちを大切にする」「よい成績をとる」といった期待では、「どちらともいえない」がやや多いものの、全体としては肯定、否定と合わせ3つの考え方に分かれる。このうち「よい成績をとる」でみると、「競争がとても+やや好き」34.8%、「どちらともいえない」

35.7%、「競争がとても+やや嫌い」29.1%で、親からの成績に対する強い期待が、必ずしも生徒の競争肯定観には結びついてはいないことがわかる。

次に、親たちからの期待をぜんぜん感じていないという場合でみると、競争に対する肯定観を示す割合がほとんどの項目で減少し、反対に否定的な意識が増加している。これからみる限り、親たちの期待は子どもたちの競争意識を支える役割を果たしていることがうかがわれる。先ほどみた「部活動で活躍する」についても、これに対する親からの期待がない場合には、競争に対する肯定意識の割合は47.8%から25.5%へと大きく減少し、「どちらともいえない」37.3%、「競争がとても+やや嫌い」36.9%の占める割合が増している。

また「よい成績をとる」が、「競争がとても+やや好き」32.6%、「どちらともいえない」27.9%、「競争がとても+やや嫌い」39.6%というように、「どちらともいえない」とするものが減少し、競争への肯定意識と否定意識の分化をみることもできる。

このように、親からの期待が低い場合には競争に対する子どもたちの否定的な意識が浮き上がってくるが、この状態は子どもたちにとってどのような意味をもつのだろうか。他の章でもみたように、過度の競争意識は必ずしも好ましいとは言えないし、それをたきつける親の姿勢にも一考の余地があるだろう。こうした中で、親には何が求められるのだろうか。

これについて考えさせられるのは、表6-8における親からの期待が「わからない」とする場合の結果である。表中の不等号は「どちらともいえない」に対して、「競争がとても+やや好き」「競争がとても+やや嫌い」

表6-8 親からの期待 × 競争意識
 (とても期待している・ぜんぜん期待していない・わからない) (%)

		競争がとても +やや好き	どちらとも いえない	競争がとても +やや嫌い
とても期待している	人に迷惑をかけない	32.2	36.0	31.5
	友だちを大切にする	32.3 <	37.6 >	29.7
	よい成績をとる	34.8	35.7 >	29.1
	困っている人を助ける	32.2 <	37.2 >	30.2
	本をよく読む	33.7	34.9	31.0
	一流の大学や会社に入る	37.5	35.7 >	25.8
	政治や社会に関心をもつ	37.0	32.4	29.9
	早く自立する(稼ぐ)	37.8 >	32.0	29.3
	親のできなかった夢の実現	37.4 >	29.2	32.4
	部活動で活躍する	47.8 >	35.7 >	15.5
	生徒会やクラスの役員になる	46.9 >	31.3 >	21.9
	ぜんぜん期待していない	人に迷惑をかけない	27.1 <	37.5
友だちを大切にする		27.2 <	33.3	37.9
よい成績をとる		32.6	27.9 <	39.6
困っている人を助ける		35.0 >	28.8 <	35.1
本をよく読む		33.7	32.4	33.5
一流の大学や会社に入る		26.3 <	31.4 <	42.3
政治や社会に関心をもつ		31.9	31.5	36.2
早く自立する(稼ぐ)		27.9	34.7	36.9
親のできなかった夢の実現		29.7	33.8	36.1
部活動で活躍する		25.5 <	37.3	36.9
生徒会やクラスの役員になる		29.9 <	36.7	33.0
わからない		人に迷惑をかけない	22.2 <	40.4
	友だちを大切にする	24.3 <	41.1 >	33.6
	よい成績をとる	28.1 <	34.4	34.4
	困っている人を助ける	22.7 <	42.6 >	33.8
	本をよく読む	23.8 <	41.8 >	33.1
	一流の大学や会社に入る	24.5 <	44.8 >	29.3
	政治や社会に関心をもつ	24.2 <	42.3 >	33.0
	早く自立する(稼ぐ)	25.5 <	43.2 >	30.7
	親のできなかった夢の実現	26.1 <	43.4 >	30.1
	部活動で活躍する	24.8 <	39.3	35.1
	生徒会やクラスの役員になる	30.2 <	39.1 >	29.5

<>は「どちらともいえない」に対して5%以上の差がみられるもの

が5%以上の差を持つもので、親の期待が「わからない」とした子どもたちでは、競争観について「どちらともいえない」とするものが際立っている。今回のデータではこうした子どもたちが期待の項目ごとに約10~20%の範囲で存在している。これをもとにみる限り、親の期待が伝わらない状態では、こうした子どもたちのかなりの部分が競争観について「わからない」、つまり「判断停止」の状態に置かれているということである。

これに対して、やはり親の果たす役割は大きいものと言えるだろう。これまでみてき

たように、親からの期待は子どもの競争観に結びつくものであったからである。ただし、また多くの親が抱く「成績」に対する期待が、子どもたちにとっては必ずしも肯定的な競争観に結びつくものではなかった。その点から言えば、親たちは子どもたちの目線と向かい合うことの中で、改めて子どもたちへの期待を語り直すことが求められているように思われる。その際、今回、各章でさまざまな形でみたように、競争観には多様な見方があることは、子どもに向かい合う者として留意しておきたい。

第7章

生徒にとっての競争と共生

1. 競争における生徒の位置づけ

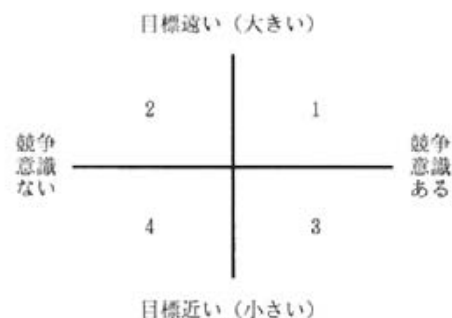
(1) 問題の設定

これまでも競争に関する研究は、さまざまな形で行われてきたが、それらはともすると遠い（大きい）目標に対して、アスピレーション（志望）をもつか、もたないか、ウォーム・アップ、クール・アウトをするかに着目がおかれてきた、と思われる。しかし実際には多くの人の人生において、遠い（大きい）目標との距離をはかって自分なりの目標をもち、また自分なりの競争意識を身につけて、競争における自分を位置づけながら競争に参加したりしなかったりするものが現実なのではないだろうか。

これを図で示したのが 図7-1である。つまり、従来の議論においては、遠い（大きい）目標を前提にして、それに対して競争意識があるかないかという「1」と「2」の部分が問題になっていたわけだが、それ以外にも近い（小さい）目標に対して競争意識をもっている「3」に属するような人々も視野に入れていきたい、と思うのである。また一

口に競争といっても、そこには勉強、スポーツ、恋愛、趣味、クラスの活動などさまざまな分野がある。したがって本章ではそれらの分野別に調査を行い、競争における生徒の位置づけを調べていくことにしたい。

図7-1 競争における位置



(2) 競争の分野と生徒の位置づけ

分野ごとに競争における生徒の位置づけをみると、それは図7-2のようになる。図に示されるように、「遠い(大きい)目標で競争意識がある」生徒は、学校の勉強(よい成績をとりたい59.7%)、クラス対抗のスポーツ試合(選手になって試合に出たい52.2%)、好きな異性(自分の彼(彼女)にしたい47.3%)、自分の趣味(その分野では、誰にも負けないようにしたい33.4%)、クラスで演劇(劇に出たい19.6%)の順になっており、やはり学校の勉強が社会から正当化された競争として、最も遠い(大きい)目標に競争意識がある者が多かった。

しかしまた、「近い目標で競争意識がある」生徒は勉強(よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい)でも26.4%おり、またクラス対抗のスポーツ試合(選手になれなくても、応援したい31.8%)、好きな異性(自分の彼(彼女)にできなくても、思い続けたい32.8%)で3割台に増加し、さらに趣味(自分より優れた人がたくさんいても、自

分なりにやっていきたい59.1%)、演劇(劇に出られなくても、手伝いたい46.7%)ではそれが最も多くなっていた。

なお、「遠い目標で競争意識がない」生徒(よい成績をとれそうもないので、勉強したくない、など)はどの分野でも数パーセントであり、「近い目標で競争意識がない」生徒(もともと勉強したくない、など)はだいたい10%台だが、趣味(4.6%)は少なく、演劇(29.3%)に多かった。

このように競争のさまざまな分野において「近い目標で競争意識がある」者はどこでも一定のパーセントを占めており、それは特に趣味や演劇のように、自分なりに目標をもちやすい分野において顕著なようであった。

次にこれを性別にみると、表7-1に示されるように、女子がすべての分野において「近い目標で競争意識がある」生徒が多くなっており、それに対して男子はスポーツの試合、異性、趣味において、「遠い目標で競争意識がある」生徒が多くなっていた。このように女子の方が、自分なりの近い目標を設定しやすい傾向があるようであった。

図7-2 競争の分野と生徒の位置づけ

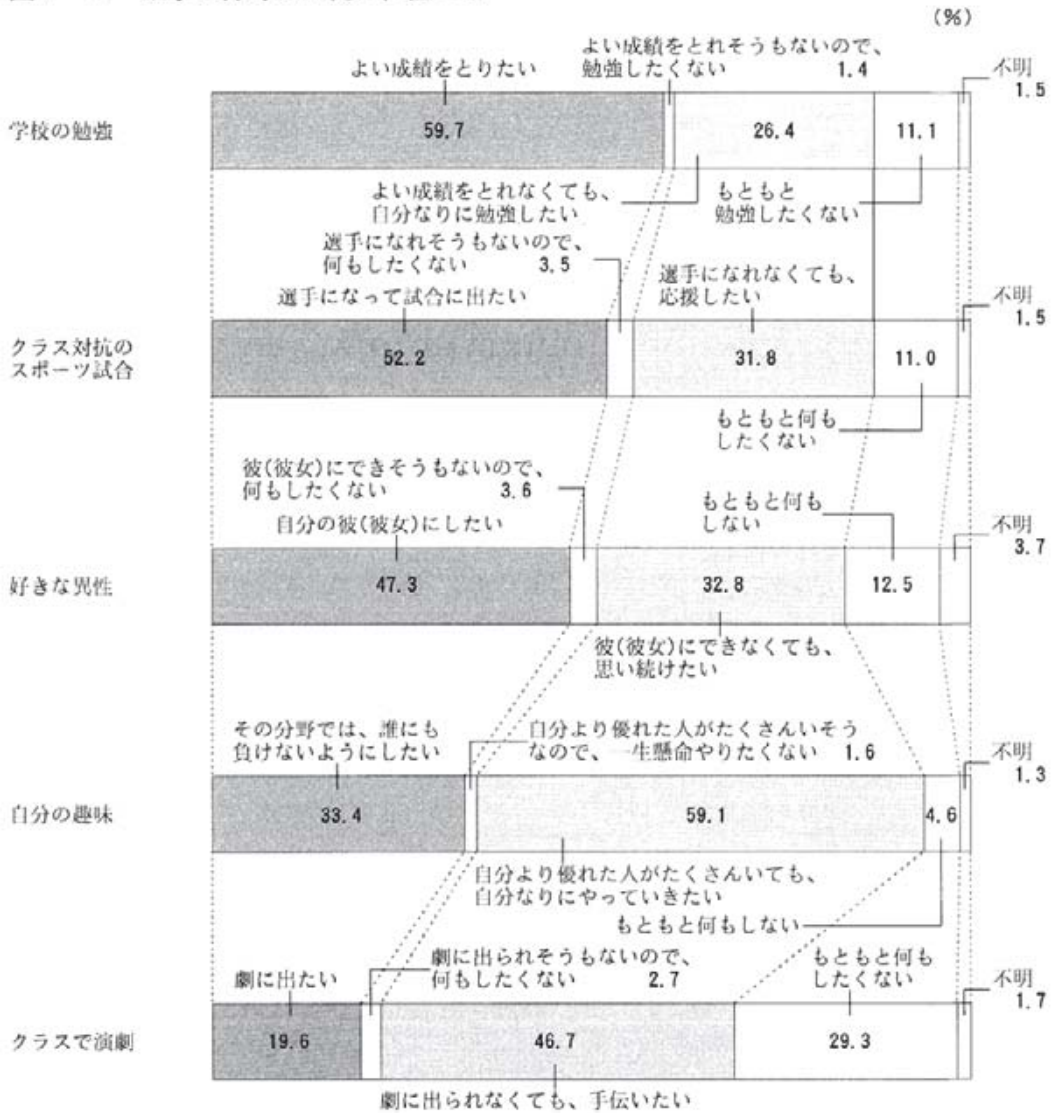


表 7-1 競争の分野と生徒の位置づけ × 性

A 学校の勉強

(%)

	よい成績をとりたい	よい成績をとれそうもないので、勉強したくない	よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい	もともと勉強したくない
男子	60.6	1.4	23.6	12.3
女子	58.6	1.3	29.3	9.8

B クラス対抗のスポーツの試合

	選手になって試合に出たい	選手になれそうもないので、何もしたくない	選手になれなくても、応援したい	もともと何もしたくない
男子	64.5	4.1	16.4	13.1
女子	40.4	2.9	46.7	9.0

C 好きな異性

	自分の彼(彼女)にしたい	彼(彼女)にできそうもないので、何もしたくない	彼(彼女)にできなくても、思い続けたい	もともと何もしない
男子	54.2	4.6	24.4	13.3
女子	40.3	2.7	41.2	12.0

D 自分の趣味

	その分野では、誰にも負けないようにしたい	自分より優れた人がたくさんいるので、一生懸命やりたくない	自分より優れた人がたくさんいても、自分なりにやっていきたい	もともと何もしない
男子	41.6	1.9	49.9	5.0
女子	25.3	1.3	68.3	4.2

E クラスで演劇

	劇に出たい	劇に出られそうもないので、何もしたくない	劇に出られなくても、手伝いたい	もともと何もしたくない
男子	20.4	3.2	37.2	37.3
女子	18.4	2.1	56.5	21.6

(3) 勉強に関する生徒の位置づけに影響を与えるもの

それでは、特に勉強に関する生徒の位置づけに影響を与えるものをみていくことにしたい。

まず教師については、表7-2に示されるように、「成績の落ちた生徒を励ます」ほど、「よい成績をとりたい」「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」という、遠い

目標にしる近い目標にしる、競争意識が喚起される傾向がみられた。そして逆に励まされない場合は、「もともと勉強したくない」という、近い目標においても競争意識がなくなる傾向がみられた。また教師が「成績のよい生徒をよく指す」場合は、逆に「よい成績をとりたい」「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」という競争意識が減少し、「もともと勉強したくない」という競争意識がない生徒が増加する傾向がみられた。

表7-2 勉強の競争における生徒の位置づけ × 教師の行動

A		(%)			
学校の勉強 教師が 成績の落ち た生徒を励ます	よい成績を とりたい	よい成績をとれそ うもないので、 勉強したくない	よい成績をとれな くても、自分なり に勉強したい	もともと 勉強したくない	
よくある	60.5	1.6	29.8	6.5	
ときどきある	62.5	1.3	27.7	7.4	
ない	57.6	1.4	24.9	14.7	
			∇	∇	
			∇	∧	

B					
学校の勉強 教師が 成績のよい 生徒をよく指す	よい成績を とりたい	よい成績をとれそ うもないので、 勉強したくない	よい成績をとれな くても、自分なり に勉強したい	もともと 勉強したくない	
よくある	54.7	1.8	23.5	17.4	
ときどきある	57.4	1.8	29.1	10.8	
ない	63.4	0.9	25.3	8.9	
			∧	∇	
			∧	∇	

次に友人については、表7-3に示されるように、「勉強の上でのライバル」がいるほど「よい成績をとりたい」という、「遠い目標で競争意識ある」生徒が多くなっていた。ただし近い目標については、「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」という競争意識がある生徒、「もともと勉強したくない」という競争意識がない生徒、ともに減少する傾向がみられた。このように「勉強の上でのライバル」の存在は、なによりも遠い目標への競争意識を喚起するようであった。

また「何でも話せる友人」がいる場合は、近い目標において、「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」という競争意識

がある生徒が増加し、「もともと勉強したくない」という競争意識がない生徒が減少する傾向がみられた。

また親については、表7-4に示されるように、「よい成績をとること」を期待しているほど、「よい成績をとりたい」という「遠い目標で競争意識がある」生徒が増加し、「もともと勉強したくない」という「近い目標で競争意識がない」生徒が減少する傾向がみられた。ただし「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」という「近い目標で競争意識がある」生徒は、親が「あまり期待しない」ときに、むしろマイペースに最も多くなる傾向がみられた。

表7-3 勉強の競争における生徒の位置づけ × 友人

A (%)

学校の勉強 勉強の上 でのライバル	よい成績を とりたい	よい成績をとれそ うもないので、 勉強したくない	よい成績をとれな くても、自分なり に勉強したい	もともと 勉強したくない
何人もいる	80.6 ▽	0.6	15.2 △	3.0
少しいる	70.7 ▽	0.8	22.7 △	4.3 △
いない	49.9	1.9	30.3	16.8

B

学校の勉強 何でも 話せる友人	よい成績を とりたい	よい成績をとれそ うもないので、 勉強したくない	よい成績をとれな くても、自分なり に勉強したい	もともと 勉強したくない
何人もいる	60.8	1.0	26.9	9.5
少しいる	60.4	1.2	27.4 ▽	9.9 △
いない	57.6	2.3	22.5	16.7

表7-4 勉強の競争における生徒の位置づけ × 親の期待

(%)

学校の勉強 親が 「よい成績 をとること」を	よい成績を とりたい	よい成績をとれそ うもないので、 勉強したくない	よい成績をとれな くても、自分なり に勉強したい	もともと 勉強したくない
とても期待して いる	71.0 ▽	0.9	18.8 △	8.3
やや期待して いる	61.1 ▽	1.3	28.3 △	8.8 △
あまり期待して いない	46.0 ▽	1.6	37.6 ▽	14.6 △
ぜんぜん期待し ていない	33.7	2.3	26.7	37.2

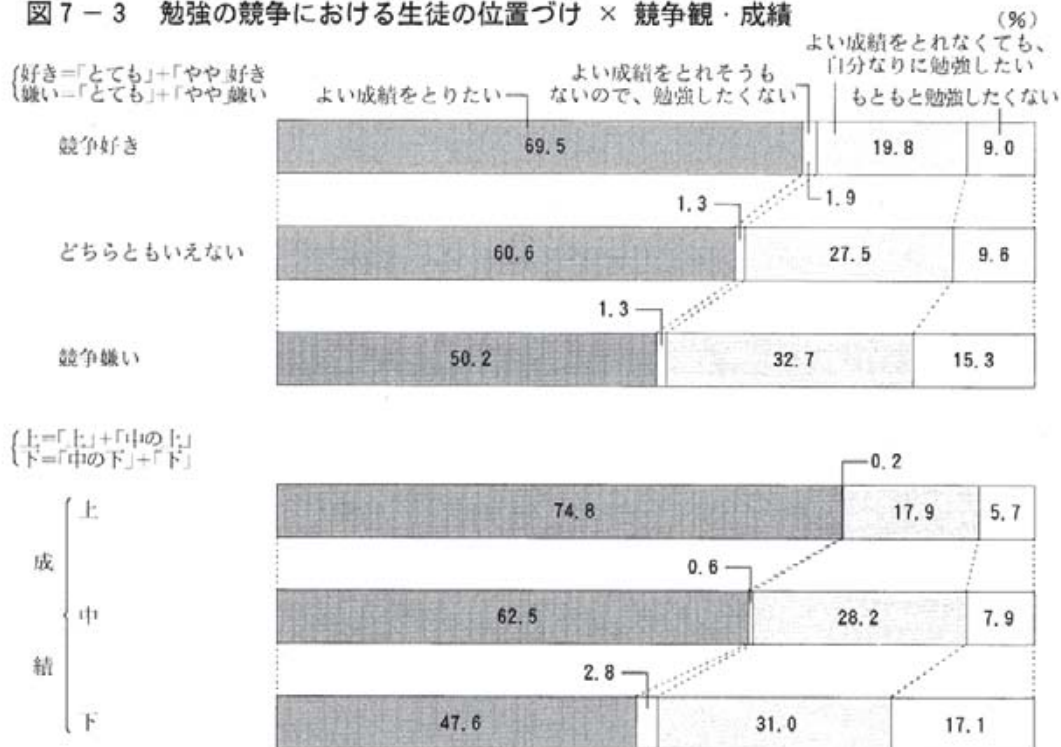
最後に、生徒の競争観と成績の影響をみると、図7-3のようになる。図に示されるように、競争が好きほど「よい成績をとりたい」という「遠い目標で競争意識がある」生徒のみが増加し、「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」「もともと勉強したくない」が減少する傾向がみられた。

また成績についても、成績上位者ほど「よい成績をとりたい」のみが増加し、「よい成績をとれなくても、自分なりに勉強したい」「もともと勉強したくない」が減少する傾向がみられた。

このように生徒はさまざまな分野において、自分なりに競争における位置づけを行っていた。競争の問題は、学校制度に代表される競争システムをどのようにするかという、シス

テムの問題として論じられる場合が多いが、またそれは、それに参加する生徒がどのように競争との関係を位置づけるのかという、生徒の生活世界の問題でもある。これまでみてきたように社会のなかで最も正当化されている勉強に関する競争においても、教師、友人、親などの影響がみられたが、またそれは生徒自身の競争観や実際の成績とも関連していた。生徒自身にとっては変動する競争システムのなかで、さまざまな分野において自分なりの居場所、競争との関係を選択できることが望ましいであろう。またその場合、高校生はまだ思春期なので、自分の居場所、競争との関係が今後とも変化する可能性があることを、生徒自身も、まわりのおとも意識しつつ、さまざまな情報に接していくことが大切であると思われる。

図7-3 勉強の競争における生徒の位置づけ × 競争観・成績



2. 共生体験のゆくえ

ところで生徒自身にとっても、社会にとっても大切なのは競争だけではない。むしろバブル経済崩壊後の阪神大震災やオウム真理教事件などにおいて、あらためてボランティア活動や学歴社会、科学の問題など、人や自然などとの共生に注目が集まりつつある。またこのような傾向は青少年だけでなく、例えば成人もふくめて、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」という生活目標が多数派になってきていることなどにも、示されている（NHK世論調査部編『現代日本人の意識構造』NHKブックス、1991）。したがってここでは、生徒たちの共生体験について考えていくことにしたい。

（1）生徒の共生の体験

高校生の共生体験をみると、それは表7-5のようになる。表に示されるように、「バスや電車で、お年寄りに席をゆずる」（64.7%）、「入院している友だちのお見舞いに行く」（63.2%）、「落ちている空きカンを拾い、ごみ箱に捨てる」（58.4%）という共生体験は6割近くあった。また「車椅子を押すのを手伝う」（25.3%）、「外国人に道を教える」（21.2%）については、そういうチャンスの有無もあろうが、2割台であった。

またこれを性別にみると、お年寄りに関する共生体験は女子に多く（男子62.2%<女子67.6%）、外国人については、むしろ男子に気軽に道を教える傾向がみられた。（男子23.4%>女子19.1%）。

表7-5 共生体験 × 性

	(%)		
	全 体	男 子	女 子
バスや電車で、お年寄りに席をゆずる	64.7	62.2 <	67.6
入院している友だちのお見舞いに行く	63.2	62.8	63.8
落ちている空きカンを拾い、ごみ箱に捨てる	58.4	56.7	60.0
車椅子を押すのを手伝う	25.3	24.4	26.2
外国人に道を教える	21.2	23.4 >	19.1

「ある」割合

(2) 生徒の共生に影響を与えるもの

それでは次に、生徒の共生に影響を与えるものをみることにしたい。

教師については、表7-6に示されるように、教師が「ボランティア活動をすすめる」ほど、お年寄り、友人、車椅子、外国人に関する共生体験が増加する傾向がみられた。

また友人については、表7-7に示されるように、「何でも話せる友人」がいるほど、

お年寄り、友人、車椅子、外国人に関する共生体験が増加する傾向がみられた。

さらに親については、表7-8に示されるように、「困っている人を助けること」を期待しているほど、基本的にすべての共生体験が増加する傾向がみられた。

このように、教師、友人、親は、それぞれ生徒の共生体験に影響を与えているようであった。

表7-6 共生体験 × 教師の行動

共生体験	教師がボランティア活動をすすめる (％)		
	よくある	ときどきある	ない
バスや電車で、お年寄りに席をゆずる	75.5	72.8 >	60.5
入院している友だちのお見舞いに行く	70.8	67.4 >	61.2
落ちている空きカンを拾い、ごみ箱に捨てる	57.5 <	62.6 >	57.0
車椅子を押すのを手伝う	34.9	31.0 >	22.3
外国人に道を教える	25.5	24.1 >	19.8

表7-7 共生体験 × 友人

(%)

共生体験	何でも話せる友人		
	何人もいる	少しいる	いない
バスや電車で、お年寄りに席をゆずる	63.6	67.4	> 57.8
入院している友だちのお見舞いに行く	69.2	> 64.9	> 53.5
落ちていた空きカンを拾い、ごみ箱に捨てる	57.4	58.4	60.1
車椅子を押すのを手伝う	29.0	26.3	> 19.4
外国人に道を教える	23.8	> 21.4	> 18.4

表7-8 共生体験 × 親の期待

(%)

共生体験	親が「困っている人を助けること」を			
	とても期待している	やや期待している	あまり期待していない	ぜんぜん期待していない
バスや電車で、お年寄りに席をゆずる	75.3	> 66.3	63.0	> 45.0
入院している友だちのお見舞いに行く	71.2	> 64.9	61.6	> 46.3
落ちていた空きカンを拾い、ごみ箱に捨てる	68.5	> 59.6	56.5	> 46.3
車椅子を押すのを手伝う	34.5	> 24.9	23.2	20.0
外国人に道を教える	27.9	> 19.5	22.1	18.8

(3) 競争と共生の関係

このように高校生の共生の体験をみてきたが、競争と共生は常に対立するものではなく、むしろ個人においても、社会においても、そのバランスが大切である、と考えられる。したがって最後に、生徒の競争観と共生の関係をみていくことにしたい。

まず競争観について、競争が「とても好き」と「やや好き」を「競争」、「どちらともいえない」を「不競争」、「やや嫌い」と「とても嫌い」を「非競争」に分類した。次に共生体験については、それぞれで体験があるものを「共生」、体験がないものを「非共生」とした。そしてこれらの関係をクロスしてみると、それは図7-4のようになる。図に示されるようにそれぞれにおいて、「競争・共生」「不競争・共生」という競争と共生が対立していない非対立タイプ、「非競争・共生」「競争・非共生」という競争と共生が対立している対立タイプ、そして「不競争・非共生」「非競争・非共生」という競争、共生ともに消極的な消極タイプが存在している。そしてお年寄りに席をゆずる(44.3%)、入院中の友人を見舞う(44.0%)、空きカンを拾う(40.2%)においては、競争と共生が対立していない非対立タイプが多数派を占めてい

た。なお、そのなかで特に「競争・共生」は、すべて男子に多かった。

このように競争が嫌いではなく、しかも共生体験もある生徒は、ある分野においては一定のパーセントを占めていた。これは先にみたように、人々の意識の変化が背景になっている、と思われる。かつての青年期は、共生的な子ども期から競争的な青年期の自立へ、というのが1つのテーマになっていた。例えば有名なM. ローリングスの『子鹿物語』においては、主人公の少年が子鹿との共生的な世界から、子鹿を撃ち、自立したおとなになることの葛藤が描かれており、そこにE. H. エリクソンの、青年期のアイデンティティ危機とその形成がテーマ化されていた。しかし現在では「偏差値の見直し」などに示されるように、学校の外において競争は必ずしもかつてほど肯定されておらず、高校生は学校文化における一元的な競争(受験競争)と、マスメディアによる青年文化における多様な共生の混在のなかにいる、と考えられる。したがって生徒たちにおいては、そのようななかで、自分にとっての競争、自分にとっての共生を見つけていくことが大切であり、まわりのおとなたちは、それぞれの生徒のタイプにあった情報提供などを行っていくことが重要であろう。

図7-4 競争と共生の関係

(%)

	競争・共生		不競争・共生		非競争・共生		競争・不競争・非競争・非共生		その他	
	競争	共生	競争	共生	競争	共生	競争	不競争		
バスや電車で、お年寄りに席をゆずる	19.6		24.7		20.1		9.7	12.3	10.4	3.2
入院している友だちのお見舞いに行く	19.3		24.7		19.0		9.9	12.9	11.4	2.8
落ちていた空き缶を拾い、ゴミ箱に捨てる	19.2		21.0		18.0		10.0	16.1	12.3	3.4
車椅子を押すのを手伝う	8.4	8.9	7.9	20.8			28.2		22.4	3.4
外国人に道を教える	7.3	7.7	6.1	21.9			29.3		24.3	3.4

非対立タイプ
対立タイプ
消極タイプ

(競争 = 競争が「とても」+「やや」好き
 (不競争 = どちらともいえない
 (非競争 = 競争が「とても」+「やや」嫌い
 (共生 = 手伝いなどの経験がある
 (非共生 = 手伝いなどの経験がない